多彩な言語活動を用いて漢詩の世界を体感し、交流する「唐代の詩」

▼教科書372ページ

授業時間	3時間
グループ規模	4〜5人程度
取り組みやすさ	1 2 3
活動領域	話・聞 書 読 言

無味乾燥になりがちな漢詩の授業をもっとアクティブに。音読唱和、イメージ読み、鑑賞文の執筆など多彩な言語活動を用いた学習活動。

付属資料 CD-ROM
●ワークシート 1〜5

学習活動のねらい

漢詩を題材に多角的な学習活動を展開して、諸能力を伸ばす。

①白文を音読・唱和する学習で、漢詩のリズムを味わうとともに、漢文の文法構造を直観的に意識することを促す。

②漢詩の内容をイメージする学習により、漢文の世界を身近に感じるとともに、生徒同士でイメージの多様さを楽しみ、内容理解を深める。

③イメージ（描写）と感想（論説）を区別して書く「鑑賞文」の学習により、達成感を味わい、表現力を伸ばす。

学習目標	学習指導要領との対応
○音読、白文訓読を通じて漢詩のリズムをつかみ、文法構造への意識を養う。	C(1)ア C(4)イ
○イメージ化する学習によって、漢詩の世界を身近に感じ、伝統的な言語文化への興味・関心を広げる。	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア
○漢詩に触発されたイメージと感想・考察を大事にして、鑑賞文作品にまとめ、描写と論説の表現を使い分ける能力を伸ばす。	B(1)ウ B(2)ア

評価の観点	評価規準例	評価の方法
関	○文法構造を意識して白文をすらすらと音読できる。 ○内容理解をふまえて、想像豊かにイメージできる。	音読の模様の観察 ワークシート、 鑑賞文作品
読	○互いのイメージを受容し、多様さを楽しむ。	グループワークの観察、 振り返り記述
書	○鑑賞文でイメージと感想の書き分けができる。	鑑賞文作品

学習活動の展開例について

3時間の学習で、三つの漢詩について白文音読、イメージ化、鑑賞文書きなどの多様な言語活動を、音読唱和やグループ内交流、匿名メッセージなどの授業手法を用いて多角的に展開する。イメージや鑑賞文を書く部分は時間数を増やしてじっくり取り組ませたり、宿題にしたりすることで、生徒や学校の実情に合わせて実施できる。

取り上げた言語活動

教師の後について音読するうち、自然に白文が読めるようになり、意味も頭に入ってくるという学習。訓点のない白文読みは、漢字の配列を意識させ、文法構造への直観的理解が身につくことをねらいとする。

また、漢詩の内容をイメージし、言語化する学習により、概念的でない、具体的理解ができる。さらに生徒同士の交流により、イメージの多様さを楽しみつつ、内容理解はさらに深まる。

イメージに感想を加えて書く鑑賞文は、生徒の個性が表現され、非常に魅力的な作品群となる。これを相互に肯定評価する匿名メッセージの活動は、教室の温かな雰囲気づくりにも役立つ。

学習活動の展開例（3時間扱い）

時間	学習活動	主な学習形態	ワークシート
1*	**1. 音読唱和（素読から白文訓読）を3つの詩について次の手順で実施する。** ❶教科書の音読唱和 ❷白文訓読唱和 ❸現代語訳→白文唱和 ❹白文→現代語訳唱和 **2. イメージ読みをする（「送元二使安西」について）。** 詩の情景を具体的にイメージしてメモし、やりとりして深める。 **3. 王維の詩のみ、音読唱和して味わい、まとめとする。**	一斉授業 ・ 全員唱和 ・ 個人作業	1 2 3
2	**1.「山行」「春望」について一連の音読唱和をして復習をする。** **2.「山行」「春望」について、ワークシートにイメージを書く。** 自分が書きやすい方から取り組み、1つできたらもう1つ書く。 **3. グループに分かれる（4〜5人）。** ❶交代で教師役をやり、白文プリントで一連の音読唱和をする。 ❷各自、「山行」か「春望」を選んで、イメージを発表する。1人が発表したら、他のメンバーが左隣から1人ずつ、イメージを引き出す具体的質問をし、発表者が答える。「どんな人？」「どんな形？」「何色？」など。全員終わったら、また次の生徒がイメージを発表し、メンバーの質問に答える、という形で全員回す。否定せず、互いのイメージを尊重する。 **4. 個人作業に戻り、イメージを書き足したり、書き直したりする。時間があれば、それぞれの漢詩についての感想も余白の欄に書く。**	一斉授業 ・ 全員唱和 ・ 個人作業 ・ グループワーク	2 3
3	**1. 漢詩3作品について一連の音読唱和をして復習する。** **2. 鑑賞文を書く。** ❶ワークシート[4]を配布し、イメージ+感想の書き方を教師が説明する。 ❷ワークシート[5]を配布し、匿名と伝える。好きな詩を選び鑑賞文を書く。 ❸裏面の右隅に自分だけわかる小さなマークを書いて提出する。 **3. 匿名による肯定的メッセージを伝え合う。** ❶ランダムに配られた無記名の鑑賞文に肯定的感想を書く。席順で次の人にワークシートを回し、3人書く。 ❷再回収後、裏面のマークで自分のシートを見つけ、感想を読む。 ❸学習全体の振り返りを書き、記名して提出する。	一斉授業 ・ 個人作業 ・ 全体ワーク	4 5

＊第1時の展開の詳細を次ページに掲載。

展開の具体例　第1時

	分	学習活動	支援の留意点	学習形態
導入	05	**1.漢詩の種類（絶句、律詩）の学習を想起し、本時で学習する3つの詩の詩形を判別し、答える。** **2.音読唱和とイメージでこれらの詩を読んでいく本時の流れを理解する。**	●前時まで別の漢詩を用いて、絶句と律詩の詩形（五言・七言）については理解している想定である。	一斉授業
展開	20	**3.音読、白文訓読練習　3つの詩について、それぞれ次の手順で実施する。個々の唱和は、適宜繰り返す。** **❶教科書の音読唱和（数回）** ●教師の後について、全員唱和で一行ずつ音読する。 **❷白文訓読唱和（数回）** ●白文プリントを用いて、教師の後について全員唱和で白文を読む。 **❸現代語訳→白文唱和（数回）** ●教師が現代語訳を一行読み、生徒は後について白文を音読する。 ●ここで語句の意味や歴史的背景についての疑問があれば質問する。 **❹白文→現代語訳唱和** ●教師が白文、生徒が現代語訳の順で、一行ずつ音読する。	●本文を見ないで耳で聞いてただおうむ返ししていると、②でつまずく。教科書を見ずに読んでいる生徒がいないか、よく目配りし、字を見るよう促す。 ●③に移ったとき、生徒の声が小さくなったら読めていない証拠なので、白文音読に戻り、再び試みるとよい。 ●現代語訳を読めばわかる内容は、重複して説明しない。補足説明や板書は最小限に抑える。 ●③④では、ただ読むのではなく、「古文と現代語を素早く同時通訳しているイメージで読むとよい」と話す（この指示は重要）。	一斉授業 ・ 全員唱和
まとめ	25	**4.イメージ読みをする（王維の詩）。** **❶ワークシート[1]の「イメージ」欄に、質問をヒントにして、イメージを思い浮かべ、メモ書きする。** ●ここで「イメージ」とは、心に浮かぶ画。具体的な画像・映像であることを押さえる。 **❷1行目が書けた生徒に、教師が挙手を求め、指名して質問する。** ●「どんな画？」「どんな色？」「どんな表情？」など。それに対して教師が全員に反応を求めるので、挙手したり、発言したりして応える。 **❸1行目に関するやりとりで書き方が理解できたら、残りの行も書いていく。** **❹時間があれば、2行目以降のイメージも、教師の質問に答えて相互交流する。**	●教師は、正解を求める、良し悪しを判定する、問い詰めるなどの態度を避ける。ただし、明らかに本文に矛盾する点は具体的に指摘して考えさせる。 ●抽象的な答えを言う生徒には、「どんなふうに見える？」「○○と××とどっち？」など、イメージを意識させる質問をする。 ●絵を描くことを禁じはしないが、国語の授業なので絵よりも心の中のイメージを大切にし、それを言葉で語り合うことを重視する。 ●一人の生徒の答えを取り上げ、「似たイメージの人？」「違うイメージの人？」と挙手を求めて、常に全員を巻き込む。挙手をきっかけに、いろいろな生徒を指名し、イメージを聞く。 ●時代背景などを適宜補足する。服装・風俗などについて、口絵や便覧、インターネット画像などを参照させるのもよいが、それに合わないものは間違いというニュアンスを避ける。生徒は情報を得て、自発的にイメージを修正し、豊かにしていくと考える。	個別学習 ・ 教師主導による相互交流

ワークシート

白文訓読練習・イメージ読み

このプリントには返り点や送り仮名、振り仮名

（一）送元二使安西（王維）

白文	現代語訳
送元二使安西	使者として
渭城朝雨浥軽塵	渭城の朝
客舎青青柳色新	宿には青
勧君更尽一杯酒	さあ、さ
西出陽関無故人	西に陽関

〈感想メモ〉

「イメージで読む鑑賞文」の書き方

文学作品を読むときには、まずその情景を心の中に思い浮かべる（＝イメージする）。そのイメージを通じて、感じたり、考えたりしてみるとよい。そのために、イメージする学習を今までやってきた。

今度は自分なりの「考え」を付け加えて、「鑑賞文」にしてみよう。

これは、あなただけの貴重な作品になる。

〈鑑賞文の構成〉

○次の二段落構成で鑑賞文を書いてみよう（サンプル参照）。

① イメージ（その詩の情景を一場面として思い浮かべ、描写する）＝小説家になる

② その詩についての感想・論評（自分の考えを論理的に述べる）＝評論家になる

〈サンプル〉

白文	書き下し文（全文平仮名）	現代語訳
渡水復渡水	みずをわたり、またみずをわたる。	いくつもの川を渡り
看花還看花	はなをみ、またはなをみる。	あちこちで花を見ながら
春風江上路	しゅんぷうこうじょうのみち。	春風そよぐ水辺の道を行く
不覚到君家	おぼえずきみのいえにいたる。	いつのまにか君の家に着いた

〈鑑賞文の例〉

高啓『尋胡隱君（こいんくんをたずねて）』（隱者の胡くんをたずねて）

イメージ

薄曇りだが、明るい春の日、中国ふうのひげ、黒い帽子、水色の着物の男性が川辺の道をゆったりと散歩している。木々にはピンクや白の花が咲き、小鳥のさえずりも聞こえる。男性は、春風にひげをなびかせ、川の流れに目をやったり、花を見上げたりして風景を楽しむ風情である。穏やかで、すがすがしげな表情。はるか向こうに、隱者の胡くんが住む小さな庵が見える。

感想・論評

親しい友を訪ねていく道。交通手段も限られた時代のことで、おそらくは遠い道のりを長い時間かけて歩いていくのだろう。隱遁して孤高に生きる胡くんを筆者は尊敬し、彼との語らいの時間を何よりの楽しみにしているに違いない。そんな友を訪ねる道は遠くとも、楽しい小旅行だ。春ののどかな風景の中に、友との交流を楽しみにする思いが感じられる詩だと思う。

ワークシート[1]〜[3]

ワークシート[4]

付属資料 CD-ROM

ワークシート[5]は、創作・交流シート。[1]〜[5]のデータはCD-ROM収録。

本時（第1時）について

平板な説明に終始し兼ねない漢詩の学習だが、能動的な学習活動の工夫で、生徒の脳をフル回転させ、高度な集中と実感的な理解を実現する授業である。

・「音読唱和による白文訓読」で、視覚的文字情報処理、聴覚的情報処理、発声機能の三つの脳機能を連動させ、漢文の実感的な理解を促す。

・「イメージ化し、言葉で書く学習」により、右脳的なイメージ機能と左脳的な言語機能、手の運動機能を多角的に活用し、活性化する。自分の知識や経験を総動員して、漢詩の意味する世界を思い描き、体感することを促す。

・「質問と挙手」により教室全体の協同思考の流れを作り出す。受け身で聞いているだけの時間を作らず、全員を巻き込んで、一人一人の脳が常にアクティブな状態を維持する。

イメージ化指導のヒント

①教師の基本的な態度

実際に画像化・映像化したらどうなるかと考えると、イメージが浮かぶ。

教師が自分のイメージを持ちつつ、思考を柔軟にして、自分とは異なる生徒のイメージに興味をもって聞いていくという姿勢がよい。

②質問の切り口の例

・形、色、大きさ、動き。

・人物の性別、年齢、服装、身長、体型、動作、表情。

・季節、天候、時間帯（昼か夜か）。暑い、寒い、温かい、涼しい。

・物音、人物の声（音声イメージ）。

・〈カメラアングル〉広角で、クローズアップで、片方の人物の側から……など。同じ風景・人物でも、撮り方で異なった画になる。

③共有する授業展開のヒント

教師が選択肢を示し、挙手させる。

・どちらのほうが長身？

・二〇代、三〇代、四〇代？……

本文に矛盾しなければ、どれもありうる、おもしろい、という雰囲気を作っていく。

さらに、例えば、ある生徒が「二人の目は涙で潤んでいる」と発言したら、「そう思う人？」と全員に振って挙手を求める。生徒の発言も選択肢にして共感者を掘り起こしていくと、教室全員の参加意識が高まっていく。

鑑賞文について

鑑賞文の書き方は、ワークシート[4]に詳述してある。教科書の詩を使うと生徒のイメージを限定するので、別の詩を例にしている。教員自身が好きな漢詩で実際に書いてみると、生徒の立場を体験でき、指導に役立つ。

前半のイメージと後半の論評でスタンスを明確に切り替えることが大切。前半は本文を誤読しない範囲で自由にイメージしてよいが、後半は本文や史実を踏まえた客観性が求められる。前半の主観的なイメージを一般的な解釈のように踏まえて後半を書いている場合には、指摘が必要である。

先生方の理解を助けるため、次に王維「送元二使安西」の作例を示すが、前述したように、これを生徒に見せるのは望ましくない。

〈王維「送元二使安西」の作例〉

現代の中華料理店のような一室。窓の外には、新緑の柳が見える。雨がしとしと降っていて、埃の匂いがする。袖の長い、役人風の服を来た男が二人、テーブルで酒を酌み交わしている。緑の服の男が青い服の男に、しきりに酒を勧めている。態度は親しげだが、表情は暗く、ことばは少ない。二人の頭には、城門の向こうに遠く広がる砂漠の風景が浮かんでいる。

当時、徒歩か馬で何カ月もかけて遠い西方に赴くのは、気の遠くなる旅路であったろう。異民族の地に使者として赴く仕事は、いつ帰れるあてもなく、命の保証はない。今生の別れを覚悟し、旅立ちの朝にもまた酒を酌み交わす二人。遠く離れても通信手段のある私たちからは想像もつかない、離別の悲しみがあふれる詩である。

ここで「中華料理店のような」は、時代考証的には不正確だが、誰しも自分の知識の範囲でイメージしているという好例で、ここでは問題視しない。もしそこにこだわる生徒がいれば、自分で調べるよう促せばよい。イメージする学習は、「うまくイメージできない」体験から、「もっと豊かにイメージしたい」という欲求を掻き立て、探究的学習への入口にもなるのである。

アクティブな授業づくりのコツ

生徒の頭がアクティブに働く授業を実現するには、どうしたらよいか。

この授業案には、そのためのコツが凝縮されている。まず誰もが参加できる活動（音読唱和）や、多様な答えを楽しむことのできる課題（イメージ化）で、全員を学習に参加させていく。

グループ活動は、進行をパターン化すると、生徒たちが自力で進めることができる。ここで音読唱和とイメージを引き出す質問は、手順を一定にして、事前に教師が全体に対してやり方を実演している。生徒はそれを真似て自分たちで進行していく。

また、一連の活動はスモールステップになっている。音読唱和で声が出れば、イメージの発言も活発に出て、グループでもできるようになる。したがって、個々のステップで生徒の活動をしっかり引き出して次へ進むことがコツである。音読の声が小さければ、教師自身が楽しさを発信して、生徒の声が出るまで繰り返す。生徒が安心して声を出せる雰囲気を作ることが、アクティブな授業づくりの最大の肝である。

とくに第3時の匿名メッセージは、教室全体にそうした温かい雰囲気をつくる仕掛けである。誰かわからない三人の肯定的なメッセージを読むと、クラス全体が温かく感じられる。こうした工夫の積み重ねで、生徒がのびのびと学習できる場をつくっていく。

評価について

①定期試験では、通常通り漢詩の読み、現代語訳等が中心の問題でよい。繰り返し音読し、イメージすることで、自然に理解が進む。イメージ自体を試験で問う必要はなく、他の教師との共通問題でも問題はない。

試験対策として一人や仲間で音読することを勧める。生徒たちは内容が自然と頭に残り、問題が解けたと報告してくれることが多い。

②イメージのメモや鑑賞文を評価するためには、次の観点を使うとよい。

- ここでいう「イメージする」ということが理解できているか。
- 漢詩の内容を正しく理解できているか。
- 漢詩の本文から具体的なイメージを思い浮かべられているか。
- 自分のイメージと、感想・論評の違いが区別できているか。
- 鑑賞文として統一性があるか。

③音読やグループ活動への参加態度を詳細に評価すべきではない。評価が前面に出ると、「楽しいからやってみよう」という雰囲気に水を差す。著しく参加意欲に欠ける場合に減点する程度でよい。

他教材への活用例

音読唱和を古文で行う場合、上段に本文、下段に現代語訳でプリントを作り、教師→生徒で、本文→本文、現代語訳→本文、本文→現代語訳の順で唱和すると、読みも意味も自然に頭に入る。

イメージ読みと鑑賞文の学習は、和歌、短歌・俳句、現代詩などでも同じ手順で実施できる。

（教育エジソン）